宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

アラン・ハット旧蔵世界労働運動史コレクション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山内, 昭人, Yamanouchi, Akito メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5758

■資料紹介

アラン・ハット旧蔵 世界労働運動史コレクション

山内　昭人

ま　え　が　き
1　コレクションの概要
2　アラン・ハットの経歴
3　コレクションからの抜粋紹介
(1)　革命ロシア関係文献・資料
(2)　1926年ゼネラル・ストライキ関係文献・資料
(3)　草稿・切抜類
あ　と　が　き

ま　え　が　き

1994年3月,「イギリス労働運動史家アラン・ハット旧蔵　世界労働運動史コレクション」が文部省の大型コレクション収集計画に入り，雄松堂書店を通じて宮崎大学附属図書館に所蔵されることになった。同コレクションの第一推薦者であった私は，図書館職員とともに同コレクションの目録作成に2年間携わり，ようやく目録原稿を完成させることができた。

この間得た知見をもとにここで行う同コレクションの紹介が，研究者の利用の一助となれば幸いである。最初にコレクションの概要を記し，次にアラン・ハットの経歴を紹介し，最後にコレクションの中から（私の理解の及ぶ範囲に限られてはいるが）二，三のまとまりを取り上げ，個別に紹介することにする。

1．コレクションの概要

和文タイトル：　アラン・ハット旧蔵　世界労働運動史コレクション

欧文タイトル：　Allen Hutt's Working Library of Books, Periodicals, and Manuscripts on the British Labour Movement, Anglo-Soviet Relations, and the Theory of Marxism-Leninism

出　版　地：　London, etc.

オリジナル出版年：　1845-1975

概　要：

イギリス並びに英ソ関係を中心とした世界労働運動史の一大コレクションである本コレクションは，登録上1,009点を数える。けれども，雑誌の各巻号数，草稿類の各点数，そして図書に挿入あるいは貼付された新聞記事類を逐一数えあげれば，優にその倍を越えるものとなっている。

コレクションの中身は，おおよそ以下の5つに分けられる。1）図書，小冊子，2）雑誌，3）草稿，切抜類，4）楽譜，5）辞書，文法書，読本等。目録では，これらの区分を基本に，以下のように分類・整理した。

B．書籍・小冊子類：　各巻も原則として1つずつ数えて，799点と重複が2点。

J．雑誌：　誌名数で53点，巻数で130点と重複が1点。うち特記されるのは，『レイバー・マンスリー』の1973年までのほぼ完全な揃いである。

M．草稿・切抜類：　ハット自らが整理したフォールダー，ファイルなどの単位で数えて52点。

S．楽譜：　2点を除いてすべてロシアでの出版で，計14点。

Z．その他：　辞書，文法書，読本，カレンダーなど大半はロシアに関するもので，計27点。

以上，1,025点で，その数は上記の登録数より目録作成過程での細分化により若干ふえた。

言語は，英語が大半を占め，仏語と露語がそれに続く。その他，独語，スペイン語があり，さらに，東欧諸語（チェコ語，ポーランド語，ハンガリー語，ルーマニア語）も散見する。ハットの著作の各国語訳のなかには，その他に中国語や日本語がある。

各文献（うち，第二次大戦期のものはわが国に入りにくかったであろう）の価値もさることながら，『イギリスにおける労働階級の状態』（1933年刊），『イギリス労働階級の戦後史』（1937年刊），『イギリス労働運動史』（1941年刊；　第5［増補改訂］版，1962年刊）などの著書で著名なイギリス共産党系の労働運動史家アラン・ハット（G. Allen Hutt；1901-73）一個人の意志によって本コレクションが個人史資料も含めて系統的に集められたことが，付加価値を高めている（ただし残念なことだが，ハット自身の著作で抜けているものがある）。たとえば，図書への書き込みや読書メモも多く，当該図書への書評や関連記事などが挿入あるいは貼付されたりしている。もちろんハット自身の手になる書評もそうで，なかには著者もしくはハットによる当該図書に関わる書簡（写しを含む）も挿入されている。

その上，本コレクションの稀少価値を高めさせているのは，運動の渦中にあった者以外では入手困難なビラ類，さらには未刊行の自筆文書などが含まれることである。

2．アラン・ハットの経歴

アラン・ハットの経歴を記す前に，主として依拠した文献・資料について触れておくと，まず，『イギリス労働運動史』が塩田庄兵衛氏らによって邦訳される際，著者ハットが作成し，訳者に送ったタイプ用紙1枚の略歴がある（その写しが著者に寄贈された訳本［理論社，1956年刊］に挿入されており，それをみると「訳者あとがき」で一部紹介されなかった箇所がある）。次に，『レイバー・マンスリー』1973年9月号に載った追悼記事があり，そして最後に重要なもので，ハットが特に

ジャーナリストとして，タイポグラファー（印刷技術者）として活躍したことを示す記事類を自ら集めた大部の切抜帳がある（本章後半で紹介するハットの二つのアルバムのうちの一つにも，1922-27年の切抜が貼られており，その中でめだつのは，『プレブズ』[*Plebs*] などに載った書評と『サンデイ・ワーカー』に載った特派員としての記事である）。

アラン・ハットは1901年9月20日ロンドンで，製紙技師の父と教師の母との間に生まれた。1919年に彼は奨学金を得て，ケンブリッジ大学（ダウニング・カレッジ）に入学し，歴史学を学び，そして修士号を得た。既に在学中から社会主義運動に参加し，大学社会主義連盟（University Socialist Federation；オックスフォード大学ではパーム・ダット [R. Palme Dutt] が活躍した）の書記を務める一方で，労働調査部（Labour Research Department）のために働いていた。1922年には2年前に創設されたイギリス共産党に入党した。入党後のハットの活動を垣間見ることのできる最も古い部類の切抜（紙名，日付なし）がある。それによると，ケンブリッジの労働組合地方評議会の特別会議で，大学メンバーであるハットが議題変更の動議を出した。それは，共産党の労働党への加入申請を認めよとの提案であったのだが，激論の末，18票対47票で否決された。

ここで，ハット入党の社会的背景について触れておく。第一次大戦，ロシア革命，続く国内の急進運動の昂揚は，中産階級知識人をマルクス主義陣営へ向かわせた。創設されたばかりの共産党に貢献することになるのは，彼らの大学で受けた教育や外国語の知識であった。1920年代においてマルクス主義知識人をめだって輩出させた職種に，タイポグラファーとビブリオグラファーがあった[(1)]。

1923年，卒業後ハットは，当時独立系の『デイリー・ヘラルド』の記者となり，その一方で共産党系のパーム・ダットが編集する『ワーカーズ・ウィークリー』の編集作業を手伝いはじめた。また，タス通信社ロンドン支局（Tass Agency [London Bureau]）にも勤めた（外交ルートを利用できる同通信社を介してハットはロシア人たちと文通していた形跡がある）。

1925年からハットは『サンデイ・ワーカー』の整理部長となり，1929年同誌が停刊した後，1年間モスクワで自由契約の記者となった。その時ハットは特に新聞印刷術に興味をもったという記事があるが，印刷術の修業は既に1927年に積んでいたことが，彼自身の回想でわかる。すなわち，副業として小さな出版社の創業を手伝った時，彼はタイトル・ページやカヴァーを含めた造本作業に従事した，と。さらに，印刷の実用的な面は美的な面と結びつかなければならないと彼が説く「印刷――それは重要か？」（1927年2月）をみると，その方面の造詣はその時既に深かったことが窺われる。帰国後ハットは，モダンになった『レーノルズ・ニューズ』（*Reynolds News*）の製作部長（production manager）となり，“George Pitman”の名で寄稿もした。第二次大戦勃発後は，同紙の夜間編集長となった。

1942年秋，ハットは同紙を去り，復刊された『デイリー・ワーカー』の整理部長（chief sub-editor）となった。と同時に，同紙のために書評を，時にはドキュメンタリーな映画の批評までも書いた。ここで，同紙の創刊時に話を少し戻すことにする。

『デイリー・ワーカー』は1930年元日，イギリス共産党機関紙として創刊され，初代の編集長に

---

(1) S. Macintyre, *A proletarian science : Marxism in Britain 1917-1933* (London, [1980] 1986), pp.93-94.

26歳のラスト（William Rust）が就いた。日刊紙刊行の経験のないラストを手助けしたのが，創刊3カ月後に加わったハットである。その前の年に党は，コミンテルンの左旋回の「新方針」を受け入れて自らの日刊紙を創刊することを決定していた。本格的には初の日刊紙創刊に対して，同じく前年に党総書記となったポリット（Harry Pollitt）は，組織力からみた財政的不安の故に時機尚早との考えをぬぐいきれず，「ポピュラーな大衆紙」としてくだけた娯楽記事も扱われることを期待したが，一方ダットは，労働者大衆への政治的影響力の拡大を求めた。ともかく政治的決定で創刊の運びとなった同紙の発行部数は，当初の計画の半分以下の1万部そこそこにとどまり，初めのうちは週の赤字が500ポンドにも及んだ。コミンテルンからの財政援助なくしては，同紙の刊行はおぼつかなかった。

ダットの考えに近かったラストは，1932年末ポリット寄りのシールズ（Jimmy Shields）に編集長を交代した。その時点で発行部数を2万部にのばしていた同紙は，有能なジャーナリストや風刺漫画家をスタッフに迎え，34年元日からはハットのデザインによるモダンな活字を採用して，徐々に部数をのばしていった。けれど，第二次大戦勃発までに5万部発行するようになっていた同紙は，1941年1月から政府の弾圧によって停刊を余儀なくされ，また同年4月のナチスによる爆撃と有力スタッフの徴兵による人的被害を蒙った。1942年9月に復刊された同紙の編集長に，（数名の編集長の交代のあと39年10月に復帰していた）ラストが再び就いた。彼はその際，有能かつ経験豊かなジャーナリストであるハットを編集部に迎えた。復刊を機に，同紙は初めて広告料をとって広告を載せた。「プロパガンダ機関紙から真の新聞へ変換」したのである。

1949年にラストが死去した時，ハットは編集長もしくは副編集長に就くことができなかった（一時評によれば，「キング通［に本部がある共産党］はジャーナリストより政治家を選ぶ」）。ハットの頭の中には辞任がちらついたが，同紙にとって幸いなことには，彼はそうしなかった。まさしくハットこそが，整理部長として同紙をジャーナリズムを通して見，同スタッフを専門的水準へ達するよう鍛えた。また，レイアウトと印刷術についての彼の知識こそが，同紙に下記の新聞デザイン賞を得させるほどのデザインを供給した。その上に，彼が同紙に作業規律，仕事割当表，そして商業紙の機能との明確な分離を導入した。ラストとハットのコンビの時代，発行部数は10万4千部に達した(2)。

イギリス共産党の運営や政策決定へのハットの関与を示す史料は，本コレクションには見いだせない。管見の限りでは，『レイバー・マンスリー』1937年6月号に載ったハットの書評が一同志，すなわち党創立時から1929年まで党中央委員会メンバーであったベル（Thomas Bell）を厳しく批判しており，そこには党派的行動があったとみられかねないものがある。1920年代にベルは党によるマルクス主義教育の指導的立場にあったのだが，その彼によって刊行されたばかりの『イギリス共産党小史』が「いかに共産主義の歴史を書くべきでないか」の最たる例としてハットによって書評された。確かに目次もなく章名もなく，また論証ぬきの決めつけ的な表現などの不備の指摘は

---

(2) Cf. K. Morgan, "The Communist Party and the *Daily Worker* 1930-56," G. Andrews/N. Fishman/K. Morgan (eds.), *Opening the Books : Essays on the Social and Cultural History of British Communism* (London, 1995), pp. 142-159; W. Rust, *The Story of the Daily Worker*, Edited and completed by A. Hutt (London, 1949), 127p.

当たっている。同書の種々の文章上の欠陥に対してハットが次のように記すところには，読みやすさを追求した印刷術の専門家としての彼の立場と通じ合うものがある（本章後半参照）。「もしマルクス主義者の著作が読みにくく，よそよそしいなら，いかに我々はマルクス主義者たちをつくりあげることを望みえようか。」それでもなお気にかかるのは，同書が党創設以前の歴史的背景に4分の1のページをさいていることや，運動のかつての政治的発展についての前おき的な説明が長々しくあることへのハットの批判である。そのような叙述の問題をハットは，「著者が自身の悪しき古い伝統と決定的には手を切っていない昔からの革命的分派主義者であるという事実」に結びつけようとした。『レイバー・マンスリー』の翌月号で同誌編集部は，同書への批判的取り扱いには事前の編集部会議で原則的に同意がなされたけれど，ハットの書評の論調ははるかに鋭すぎるし，個人的すぎる，と論評した。と同時に，本書を党史とみなさないように，との党書記局の勧告が伝えられた(3)。結局ハットにとって単に「分派的」記述が気にさわっただけなのか，あるいは，「事前の同意」に政治的意味が込められていたのか，さらには，ポリットら党執行部の意向がその中に入っていたのか，これらの疑問は今のところ解けない。

ここでハットの印刷術，とりわけ新聞の印刷・デザインに関する経歴について記しておく。

その専門家として彼の評価は高く，実際にハットは，1936年の『レーノルズ・ニューズ』，1942年と48年の『デイリー・ワーカー』，そして1952年の『マンチェスター・ガーディアン』のデザイン変更を担当した。また，第二次大戦前から数年間彼は，モノタイプ印刷会社の新聞印刷術に関するアドヴァイザーも勤めた。その一方でハットは，大学や労働学校などで印刷術に関する講師を長年勤めた（切抜帳には1947，53，56年のロンドン大学での公開講座やNUJ［下記］中央ロンドン支部主催の講演に関する計4つの案内がある）。1950年に彼は，『ジャーナリスト』に載せた諸論文を一書にまとめた。その『新聞印刷術大要』の序文には，次のようにある。「要するに問題の核心は，個別の新聞の与えられた状況の中でいかに活字を使うか，そして他の活字よりむしろその活字をなぜ用いるかを学ぶことである。」その「いかに」と「なぜ」が本文で説かれた。

1957年末，その年の業務用名刺・カヴァーのコンクールのため審査員3名のうちの一人にハットが選ばれ，審査にあたった。その審査員をハットは連続して1962年まで勤めたことが切抜帳の記事でわかるが，終わり頃は，参加作品の質量ともに失望させられたとか，改善が予想以上に進んでいないのは技術教育がうまくいっていないからではないかとかの審査評が下されており，（妥当な評であるかは判断できないけれど）審査がおざなりでなかったことが窺われる。またハットは，1959年の新聞デザイン賞の3名の審査員の一人にも選ばれた。

ハットのその方面の評価を門外漢の私が下すことはできないけれど，たとえば彼の論文「細かい活字を組むこと」（1961年6月）や「ドーリア式活字革命」（1962-63年冬）を読む限りでも，ハットの造詣の深さが垣間見られる。細かい活字組みが半意匠組版によってはるかに読みやすくなる例示は，説得力がある。細かい活字による「CとO」や「3と8」などの誤読や難読の解消に，若干

(3) A. Hutt, "How Not To Write Communist History," *Labour Monthly*, Vol. 19, No. 6, VI.1937, pp. 382-386; *ibid.*, Vol. 19, No. 7, VII.1937, p. 453.

変形させたドーリア式活字が有効であることが説かれる。

ハットの実際の力量は，ハット・コレクション中の，とりわけ1920年代の二つのアルバムによく窺われる。ともに大版のアルバムで，一つには“Communist Bookshop”（のちに“Workers' Bookshop”）の新刊・在庫案内（広告）のためのレイアウト類が，もう一つには，ハット自身が重役の一人であったマーティン・ローレンス出版社が出す本のカヴァー・デザインや広告などの見本類が，それぞれ台紙に貼られている。

その間，ハットは1925年に全国ジャーナリスト組合（National Union of Journalists）に加入し，46年以降は同組合唯一の共産党員の全国執行委員会メンバーとなり，48年以降は同機関誌『ジャーナリスト』の編集に携わっていた。同編集者に再選されたハットに対して，1962年にNUJの最高の賞である名誉会員ゴールド証明書が与えられた。このことについて『カトリック・タイムズ』（1962年5月11日号）は，ハットが著名な共産主義者であるにもかかわらず賞をとったことへの反発をあらわにした。が，結局のところ，政治的立場の如何を問わず技能の習熟者は認めざるをえないことを，間接的に認めているような論評に，それはなっていた。

ハットのこの方面の能力について，『レイバー・マンスリー』の追悼記事は次のようにまとめている。「しかし，プロフェッショナリズムは，彼にとって決して無味乾燥な経験ではなく，『不浄財と職』に関わるのではなく，一共産主義者が自らの技能に精通することが，彼の政治への誇りの表現であり，運動のためにより良く働く手段であるという考えと関わっていた。」(4)

このことをハット自身の文章で確認しておこう。「[ウィリアム・] モリスが最初でかつ最大のその例であった，マルクス主義者と印刷術との生きた関係を，理解することに，いかなる困難も実際あるはずはない。印刷の技術よりも大いに弁証法的なものは，たとえあるにしてもほとんどない。それは，マルクス主義者が特に捉え，解決することができるか，あるいは，できるべきである一連の矛盾を呈示する。すなわち，理論と実践の矛盾はもちろんだが，また形態と内容の，芸術と科学の，美と実利の（また，新聞や雑誌の場合，時間とスペースの）矛盾も。」(5) 先に紹介したハットの整理部長としての役割についてもまた，同様な捉え方がなされていたことが，ハットが編集し，整理部の「バイブル」とみなされていた『デイリー・ワーカー整理部員のための覚書』から確かめられる。「整理編集することは，とりわけ我々のような新聞については，それ自体において政治的側面と技術的側面とを結びつける。両者は理論と実践がそうであるのと同様に分離されえない。そのことは，もし我々整理部員が技術的な効率に集中し，共産主義者であることを忘れるならば，役立たない。つまり，政治の健全かつ生き生きした把握（それは個人的な政治的活動と思考を意味する）がなければ，この世におけるすべての技術的な熟練は，それだけ一層空疎な，そしてしばしば危険な技術である。」(6)

ハットは長い活動歴をもった共産主義者であり，実践的，啓蒙的，そして学術的な著作を数多く著した労働運動に関する歴史家であり評論家であった。とともに，他方では，（恐らく父親から職

---

(4) A. Brown, “Allen Hutt September 20, 1901-August 10, 1973,” *ibid.*, Vol. 55, No. 9, IX.1973, p. 400.

(5) A. Hutt, “Morris, Marxism and Typography,” *ibid.*, Vol. 39, No. 10, X.1957, p. 468.

(6) [A. Hutt (ed.)], *Notes for Daily Worker Sub-editors* (London, n. d.), p. 3.

人気質を受け継いだのであろう）有能な新聞印刷術の専門家であった。これら複数の分野での活躍は，ハット個人の中ではあくまで一つに結び合わされていたのであり，その証拠の一つが，まさしく彼自らの手でよく整理された本コレクションの中身であると言えよう。

3．コレクションからの抜粋紹介

(1) 革命ロシア関係文献・資料

ロシア10月革命がハットに及ぼした深い影響なくしては考えられないことだが，彼は革命直後から数年間のロシアに関する文献（レーニンらの著作や政府関係文書の訳書や革命報道など）の収集とノート取りを精力的に行っていた。しかも，かなり系統だって行われたことが，本コレクションの中にあるノート類からわかる。つまり，一つのフォールダーにはロシア革命に関する文献リストがあり，それは英語と仏語の各文献に分けて作成されている。仏語の方は，タイプに打ち直されたリストをノリとハサミで著者のアルファベット順にノートに並べ直していて，その数は関連文献も含めて60にのぼる。英語のリストの方は，手書きで著者もしくは書名のアルファベット順に記された用紙が数枚あるが，それらを集計するまでには至っていない。その一方で，各文献の出版社や出版組織に特に注意が払われる表記になっている。

また，イギリス議会に提出され，1921年に公刊された『ロシアに関する情報収集委員会の（政治的・経済的）報告』には，30数枚のノートが挿入されており，それらの大半は読書ノートで，10数点の英語，仏語文献が取り上げられている。

実はこの挿入物の中には，1点だけ当時のリーフレット『ロシアの労働者と産業管理』が含まれていた。それは，ロシア情報の伝達を主たる目的としてシルヴィア・パンクハースト（E. Sylvia Pankhurst）を中心に革命ロシアからの資金援助のもとにロンドンで創設された人民ロシア情報ビューロー(People's Russian Information Bureau)によって恐らく1919年に刊行されたものである。運動の渦中で散逸を免れがたい同ビューローのリーフレット類（約40点の刊行が確かめられる）の収集にハットは力を注いだようで，それらはコレクション中に合計7点数えられる。

次に，ハットが収集に努めた初期革命ロシアに関する文献を，見渡してみる。

1）レーニンの著作のうちイギリスにおける最初の部類に属する訳本8冊がある。その中にはイギリス社会党と社会主義労働出版部の共同の初訳『国家と革命』があり，またグラスゴーの社会主義情報・調査局（Socialist Information and Research Bureau [Scotland]）によって出された『活動中のソヴェト』など計5冊が背表紙に『レーニン　I』と記されて合冊製本されている（なお，1931年にレニングラートで出た『外国語でのレーニン：　書名索引』があるが，それは今日においても利用価値の高い独，英，仏語訳のレーニン著作の注釈付き目録である）。その他のボリシェヴィキの英訳本は意外に少なく，ラデク，ロゾフスキーらのがあるが，トロツキーの著作は（この時期以外のものも含めて）一冊もない。

2）革命ロシアに関する資料や報告，体験記類も網羅的とはいえないが，30点近くある。具体的には挙げないがハットが収集したそれらの出版元は，当然のごとく運動の側のものが多い。すなわち，上記社会主義情報・調査局と（いずれもロンドンだが）イギリス社会党，労働者社会主義連

盟，独立労働党，イギリス共産党，そして労働調査部である。この種の文献はまた，仏語のものも集められており，その数は10点を越える。

3） 1920年を中心に19年から21年にかけてモスクワ及びペトログラートで出版された英語版と仏語版が，それぞれ10数点と10点近くある。コミンテルンが出版元のものは，広く普及しているものだが，目を引くのは，モスクワの労働組合評議会（All-Russian Central Council of Trade Unions）とペトログラート同支部が出版した英訳小冊子・リーフレットである。10点を数えるそれらは，同評議会の大会報告，決議集や加盟各組合の概要が主だが，なかには，1920年5月イギリス労働者代表派遣団のペトログラート同評議会での演説報告や，イギリス炭坑夫連盟へロシアの同業の協会が出した自国の炭鉱業の現状報告（1920年5月5日付）もある。

4）少し時間がたった1923年以降の英ソ関係の文献がまとまっており，書籍では1920年代だけで，約10点ある。その中では，労働者組織間の交流に関する文献がめだつ。なお，英ソ関係については『英－ソ・ジャーナル』など英語雑誌も一部ずつだが6種収集されており，内訳は1920年代，30年代，そして50年代のものが2種ずつである。

(2) 1926年ゼネラル・ストライキ関係文献・資料

炭坑夫の賃金引下げ等をめぐる労使紛争から引き起こされた1926年5月4 -12日のイギリス・ゼネラル・ストライキに関する文献類を，以下みていく。

コレクションの中でまず目にとまるのが，その第一の当事者である炭坑夫連盟（MFGB）の刊行物である。ゼネスト前夜のものでは，前年の『最近の賃金危機に関連して受理もしくは発行された全報告・通信・議事録の写し』や，直前の1926年4月27日に準備された炭鉱経営者による提案への反論の声明（案）がある。（以下掲げる刊行物でもしばしばそうだが）後者では，炭坑夫の賃金が体力を維持する最低限の段階にきていることを論証するための詳細な賃金率比較表が付されている。

ゼネスト後には，MFGBによるゼネストの原因や経過説明が繰り返され，たとえば1927年1月27日付の『1926年5月のゼネラル・ストライキに関する声明』があり，また，クック（A. J. Cook）による『9日間』がある。私家本としてしか公刊されなかった後者では，なぜTUC総評議会がゼネストを解くに至ったかの経緯が記され，それは総評議会への激しい批判の下で書かれた個人説明ではあるものの，MFGB書記として渦中にあった者のドキュメントとしての価値は高い。また，MFGB執行委員会報告の1927年版と28年版があるが，いずれも逮捕者の支援報告や失業者数の増加等の指摘などがあり，ゼネストの「後遺症」が残っている。

TUC総評議会において，MFGBをはじめ加盟組合代表間でゼネスト前夜および直後に激論がたたかわされた。それらの報告や議事録が4つまとめて収録された192ページからなる公式報告『炭鉱業の危機と1926年全国ストライキ』（1927年刊）は，重要である。収録されたものは，以下のとおりである。①炭鉱業の状況： 加盟組合執行委員会特別会議［1926年4月29日－5月1日］報告，②炭鉱業，全国ストライキを論ず： 総評議会の加盟組合執行部会議への報告［1926年6月25日付］，③労働組合執行委員会会議に際してのMFGBの声明［1927年1月12日付］，④全国ストライキ特別会議： 全国ストライキに関する総評議会報告を考えるための全加盟組合執行部特

別会議［1927年1月20-21日］議事報告。

最後のものは，独立して刊行されたもの（64ページ）もコレクションの中にあるが，この特別会議で総評議会によるゼネスト報告を採択するかどうかをめぐって激論がたたかわされた。結局，284万票対109.5万票でそれは採択されるのだが，途中の討論ではMFGB代表と総評議会多数派との対立が鮮明で，特にクックとシトリーン（W. M. Citrine）双方の意見の対立，くいちがいは慎重に吟味される必要がある。

ハットはゼネスト関係の史料を一つのフォールダーにまとめており，その中には彼が居住するロンドンで集めることのできた10点の小機関紙，ビラ類がある。とりわけ重要なのは，共産党もしくはハリー・ポリット夫人（Marjorie Pollitt）によって出された4ないし2ページ立ての『ワーカーズ・ブレティン』（*Workers Bulletin*）で，1926年5月4，5，6，13，14日の5つの号が収集されている。

5月4日のストライキ特別創刊号には，本ブレティン刊行の意図が，政府が放送局を支配し，彼らの「ニュース」速報だけが情報を流している中で，ストライキ側に真のニュースを伝えるためだと記されている。5月5日の特別第2号では，さらに進んで，BBCの放送を無視するように，と言うだけでは不十分で，本ブレティンでは限られた部数しか毎日出せないが故に，総評議会に対抗措置を講ずるよう，つまり対抗する新聞を出すべきことを訴えている。同日にその対抗小新聞『ブリティッシュ・ワーカー』は創刊されていたのだが，その日の晩『デイリー・ヘラルド』印刷所で同紙を印刷中20名の捜査官が立ち入り，出来上がりの15部を検閲のために警視庁に送ることになり，結局紙面変更は要求されなかったけれど，この間7時間刊行が遅れた経緯は，5月6日の特別第3号で報じられた。

以後の号でも続くこのような細部の事実報道はロンドンが中心で，しかも限られた組合に関するものだが，それらは史料的価値をもつか，あるいは，もつかどうか検討に値するものと言える。その一方で，共産党による声明が第2号以降毎号掲載されているが，それらの論調は細かい事実報道のトーンとはかなり対照的である。たとえば，第2号に載った「勝つために闘え！ゼネストの政治的意味」では，炭鉱の国有化が掲げられ，そして労働者政府の形成や，頑強な組合員による労働者防衛団の組織化も呼びかけられた。闘争を従来の自己防衛的なものに限定しようとすることへの警告を労働者へ向けて発したこの共産党の主張は，他の紙面に比べて明らかに過激すぎる。かかる主張は現実のゼネストとどのように実践的に結びつきうるのか，その手段と方法が具体的に提起されることはなかった。

この共産党の論調は貫かれる。5月13日号に載った声明「炭坑夫に味方せよ！」では，総評議会のスト中止は炭坑夫に対してばかりかイギリス全労働階級に対する最大の罪だと断言され，ストライキ委員会と行動評議会の緊急会議開催が要求された。5月14日号でも，今や全国的指導を失った各地のストライキ委員会は直ちに自らを刷新し，各地区会議を開き，その上に全国会議をめざせ，これだけが新しい指導力を生み出すことができる，と表明された。

この内容に関連する全国少数派運動（National Minority Movement）の5月3日付回状も，ハットの同フォールダーにある。行動総書記の名でロンドン地区メンバーに宛てられたその回状によれば，雇用主と政府による労働組合への戦争が始まった。彼らは炭鉱地域へ軍隊を特派しつつある。

あらゆる地域で労働組合地方協議会が責任をとらなければならないが，それらはすべての労働組織を代表していない。故に，行動評議会が組織されねばならない，と。

この少数派運動にハット自身が当時期待していたことが，在ブリュッセルのダット宛1926年6月1日付書簡（官憲の検閲に遭う）に窺われる。すなわち，TUC総評議会のヒックス（G. Hicks）らを激しく非難した後，ハットは次のように記していた。「任務は今や新しいリーダーシップを築くことであり，それは少数派運動と，地区や地方の専従者の中の最良の分子を意味する。」(7)

もう一度ハットの同フォールダーに戻って，その中には，その他のブレティンも散発的だが集められており，『TUC総評議会ブレティン』（第3号）や，『西ロンドン鉄道員ストライキ・ブレティン』（5月9日号と日付なしの号），『イズリングトン・ブレティン』（第4号，5月9日）がある（なお，リーズの仕立屋・衣服労働者組合機関誌『ガーメント・ワーカー』1926年5月の「ゼネラル・ストライキと炭鉱の状況」に関する特別号が雑誌コレクションの中にある）。また，総評議会執行部シトリーンらのスト中止指令釈明演説や共産党下院議員サクラトヴァーラ（Shapurji Saklatvala）のメイ・デー演説をそれぞれ記録したタイプ印刷などもある（サクラトヴァーラはこの演説が口実となって5月4日朝，議員特権を無視し逮捕された）。

ハットの草稿類の中にもう一つ，ゼネスト関係のノートブックがある。それは未だ炭坑夫のストライキが継続されていた1926年9月8-11日にボーンマスで開かれたTUC年次大会に彼が『サンデイ・ワーカー』特派員として出席した時のもので，その手書きノートの内容を読み取るには，議事録との比較照合が必要である（ハットの記事は閉会日の翌日『サンデイ・ワーカー』に載るが，その見出しは「TUC，ストライキにつきまとわれる／大会は幽霊を退散させようとしない」であった）。

次に共産党系の文献をみると，当然のごとく，それはよく集められている。ゼネストの翌月に出た匿名（“C. B.”）の『共産党員（レッズ）とゼネラル・ストライキ』は初版と増補改訂版があり，また4カ月後に出たマーフィ（J. T. Murphy）の『大ストライキの政治的意味』は共産主義者による解釈を代表していると言ってよい。すなわち，（第一次大戦中からゼネスト前夜まで自ら体験したショップ・スチュワード運動や労働者委員会運動との関連でゼネストを捉えようとする傾向も手伝って）マーフィは次のように捉えた。1920，21，25年の出来事と不分離の関係にゼネストはある。ゼネストはブルジョワジーの権力の経済的基礎を弱体化させたが故にかえってブルジョワジーの政治的力を強化した，と。イギリス労働階級史上最大の政治的事件とゼネストを捉えた著者は，続く最終戦を展望している。

そして，ゼネスト5カ月後の10月16-17日に開かれたイギリス共産党第8回大会の報告・決議集（1927年1月刊）は，26年年頭以来のゼネストへ向けての準備から，ゼネスト後の党への攻撃の激化（12名の党員，うち10名は中央委員会メンバー，が逮捕され1年か半年の刑が宣告されている）へ至る「公式」の経過報告となっている。

1928年7月にはハット自身の共著『共産主義と石炭』も共産党によって刊行された。ハットが

---

(7) B. Weinberger (ed.), “Communism and the General Strike,” *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, No. 48, 1984, p. 41.

第1部「石炭資本主義の経済的状況」を著わし，第2部「炭坑夫と彼らの闘争」は最近までMFGB執行部メンバーであり，後に南ウェールズ炭坑夫連盟会長となるホーナー（Arthur Horner）が担当した。

当事者から少し離れたところからの文献として目にとまるのは，労働調査部の年次報告書で，1925年7月から26年6月までを扱った『第14回年次報告，1925-1926年』が炭鉱危機を集中的に取り扱っている。以下は，同報告による。労働調査部はゼネスト前夜に『炭鉱業の危機』などを出し，ゼネスト直後もMFGB執行部の承認・協力のもとに同テーマのリーフレット類を準備している。1924年のTUC大会では，総評議会がこの問題で労働調査部との共同調査を進めるようにとの動議がなされ，MFGBからもそれは支持されたのだが，総評議会からの動きは未だない。ゼネスト直後に労働調査部は，各地の労働組合地方評議会にアンケートを送り，ゼネスト中の活動等に関する報告及び資料提供を要請したのだが，それに対しては十分な応答があった。そのわずかな要約だけが『労働調査部月報』（*Monthly Circular of the Labour Research Department*）に公表されたのだが，包括的な記録をすみやかに公刊することが提案された，と。

その各地からの報告は，労働調査部調査書記を務めていたバーンズ（E. Burns）の『1926年5月，ゼネラル・ストライキ：　活動中の労働組合地方評議会』(1926年刊）の後半約100ページにわたって収録され，今日よく利用されているのだが，同書もコレクションの中にある。同じく地方の動きについて目配りした記述のある『大ストライキの労働者の歴史』（1927年刊）もあるが，こちらは各地の『プレブズ』通信員によって提供された資料をもとに，運動への最後の共感を寄せていた元共産党員ポストゲイト（R. W. Postgate）を中心に3名によってまとめられたものである。

ハットによって批判される側の文献（たとえばTUC総評議会の有力メンバーらが後に出した回想類など）は，バランスを欠くほど少ない。その部類に属する1929年に出た二書が含まれているが，それはそれらをハットが「我々はゼネラル・ストライキを忘れてしまったのか？」のタイトルで批判的に書評したからである。一つはTUC調査・経済部書記の肩書をもつ者（W. Milne-Bailey）による学生用の『労働組合史料集』で，その中にはゼネストに関する史料はわずか9つ［実際には10］しか収録されていないばかりか，MFGBのものは全くないことが，ハットによって批判された。

(3) 草稿・切抜類

ハットは何をどのように研究したのか。もちろんその結果は彼の著作に結実しているものが多いであろうが，その途中経過を知るには，彼が残した切抜，ノート，草稿類が格好の資料となる。ハット自身，それらをフォールダー，ファイル，バインダー，ノートブックなどを利用してテーマ毎にまとめており，今回の図書館作業では変更をほとんど加えないまま，“Memorabilia”（記憶すべき事柄の記録類）と一括して分類・整理を行った。その中身の概略について紹介しておく。

1）マルクス主義，レーニン主義に関する著作のタイプ訳稿やノート類。その中で，レーニン著作集から16点が訳されタイプ打ちされ，そして1冊に製本されたものが目を引くが，それはロシア共産党の歴史を教えるコースのために準備された教材であった。

2）1939年の英ソ関係の切抜帳や1929-30年と61年の訪ソ時の旅行ノートの他に，英露関係のほぼ4世紀にわたる歴史をハット自身が書きためたタイプ原稿が25点もある。

3）切抜類でめだつのは，1948年と68-69年のチェコ－スロヴァキアに関するものであり，後者には5冊の小冊子類が挿入されているが，いずれもいわゆるチェコ事件についてのソ連邦ないしチェコの「公式」見解を表したものである。他でも散見するこのような文献類収集の片寄りは，終生イギリス共産党員であったハットには避けられなかった。その他の切抜には，第二次大戦中のバルト諸国とフィンランド関係がある。

4）残りは，イギリス労働運動および労働組合に関するもので，ハットのその方面の著作に結実するノート，草稿類が当然のごとく多い。その中で興味を引くものには，トム・マン（Tom Mann），ベヴィン（Ernest Bevin）らのフォールダーがあり，ロンドン，クライドサイドとスコットランド，そしてランカシャーと南ウェールズの各地域に関する詳細なデータ類のファイルがある。

5）本コレクションには残念ながら，書簡類は例外的にしか含まれていない。第1章で記したように図書に挿入されている書簡以外には，一つのフォールダーにだけまとまって書簡がある。それは，フールスカップ版のタイプ印刷「20年前：　同志ハリー・ポリットの共産党総書記としての20周年記念のために」（1949年8月）が入っているフォールダーで，その中に計42通の手紙（ないし写し）がある。その内訳を以下に略記しておく。①H. P. Rathbone（スウェーデン／モスクワ），1925-26年，3通；②P. J. Schmidt（アムステルダム），1926，1928-29年，14通；③Maurice H. Dobb，1926-28年，20通；④MFGB機関誌『マイナー』編集者，1929年，3通（反論のために投稿したが，掲載されなかったハットの原稿「炭坑夫と合理化」もある）；⑤『オブザーヴァー』編集者，1966年，2通。

6）なお，ハット自身の職業に関する切抜帳やアルバムについては，第2章で言及した。また，重要なフォールダーに，1926年のゼネストに関する原史料を集めたものがあるが，それも前節で紹介した。

あとがき

ソヴェト連邦解体とほぼ時を同じくしてイギリス共産党も解党し，同党のアルヒーフ史料は一括してマンチェスターに創設された“National Museum of Labour History”へ1994年に寄託されることになった。その中に「ハット・ペイパーズ」があり，本来ならば，ハット・コレクションも同所に加えられるのが最もふさわしいのかもしれない。が，宮崎大学附属図書館が同コレクションを所蔵することになった以上，国内はもちろんのことイギリス本国の関係諸機関にも同コレクション目録（本文はすべて英語表記にしてある）を送付して，コピーによる資料提供などの便宜をはかっていかなければならない。（ただ残念なのは，目録刊行が遅れていることである。刊行までの間，仮目録の複写依頼には私が応ずることができる。）

最後に，同コレクションの目録作成および整理作業には，日高裕志前事務長のご配慮により，日常業務の合間をぬって4名の図書館職員があたることになり，とりわけ田中由紀子，野村智子両氏の尽力が大きかったことを，記しておく。

（やまのうち・あきと　宮崎大学教育学部教授）